

清末期の日本人学者による 北京官話の声調認識

——四種類の、日本人学者編集の中国語の辞書と
教科書を手がかりに——

李 无 未

1. 清末期、四種類の、日本人学者編集の 北京官話の学習辞書と教科書

現代中国語普通話（共通語）の声調システムは、調類、調値、本調、変調などによって構成され、ほぼ完成された声調認識のメカニズムになっている。この声調認識のメカニズムは、ある過程を経た上で形成されてきたものであるため、その形成過程の究明は、中国語声調の研究史において非常に重要である。それは、少なくとも中国語の声調認識の歴史を包括的に纏めるための手助けとなるばかりでなく、中国語声調の発展を科学的に捉え、いまだに解明のできない声調の変遷を明らかにすることができるからである。

本稿は、清末期の日本人学者の編集した四種類の中国語の辞書と教科書を手がかりにして、当時の中国語声調の研究の状態を把握し、同時に今日の普通話の声調との比較によって、清末から現在に至るまでの研究者の声調認識の変遷を跡付けるとともに、当時の人々が持っていた中国語声調に対する認識を考察しようとするものである。

日本人学者と中国人学者の声調認識の視点は違っている。日本人学者は、中国語声調を学習するために、理論上はもとより、実践上においても

苦しい模索を行っていたので、これを考察することによって、清末期における日本人学者の中国語声調の教育と研究のモデルを知ることができる。外国人を対象とする中国語声調教育の立場から、これらの教科書を考察すれば、その中に含まれる数多くの共通性を有する法則を発見することができるであろう。これらの法則を把握し、歴史を鏡とすれば、現在の外国人に対する中国語声調教育とその研究の進展に貢献することになるであろう。声調教育や研究に有益なものであれば、吸収すべきであるし、これこそ中国語教育者や研究者が持つべき科学的な姿勢であろう。

日本人学者が編集した代表的な中国語辞書や教科書は、以下の四種類である。

1. 1 『日清字音鑑』(以下『音鑑』と略す) 伊沢修二、大矢透著、明治 28 年 6 月 (1895 年)、大日本図書株式会社発行。

本書の体裁は、次のようである。本文の前に「緒言」があり、「緒言」は「音韻」と「四声」に分かれる。本文には漢字字音の図表がある。縦列は日本語のカタカナで「ア」「カ」「ガ」「サ」「ザ」「タ」「ダ」「ナ」「ハ」「バ」「マ」「ヤ」「ラ」の五十音順に配列し、横列は四声に分類して「上平」「下平」「上声」「去声」の順で配列している。表中にはそれぞれに該当する漢字を示し、その右にカタカナ、左にローマ字(アルファベット)で表音している。また同音字や音の近い漢字がすぐに分かるようになっている。

著者は「緒言」の中で、北京官話を参照して注解すれば、ローマ字やカタカナはこうになるとし、中国語は声調の区別を最も重視するものがあり、通例では平上去入の四声に分類するが、北京官話では上平、下平、上声、去声で入声がない。よって通例とは異なると述べている。

1. 2 『日清会話辞典』（以下『会話』と略す）池田常太郎編，明治 36 年 9 月（1903 年），東京丸善株式会社発行。

本書は四つの部分に分かれる。第一は「緒言」で、「四声略説」と「発音法」に分かれ，表音の方法について説明を加えている。

第二は辞典の本文である。これは縦四列に分かれ，一列目はアルファベット順で英語の語句を表記するものであり，それらの語句は次の列の日本語と中国語に対応している。二列目は対応する日本語の語句で，ほとんど漢字で表記し，その読みをカタカナで示したもの。三列目は対応する中国語で，漢字で表記し，その読みをカタカナで示したもので，漢字の声調を「四角圈点法」で表記している。四列目はローマ字による表音。主にウェード式を採用しているが，修訂したところもある。

第三は付録の表である。数字，月名，日数，一週日，時，四季，方角，貨幣（北京，天津，上海手形用略字），度制（尺度，里程，地積），斗量，衡制，官名（北京各衙門，地方庁，武官），地名（各省及省城，互市場），締盟各国に分けられている。それぞれ日本語，中国語，ウェード式ローマ字で示している。

第四も付録で「日用会話」である。会話には日本語のフレーズと中国語のフレーズが対応させてある。中国語のフレーズは，カタカナとローマ字が付されている。会話文典摘要，命令詞，疑問詞，断定詞，接続其他雑詞，会話の六種類の内容に分けられている。

著者は「緒言」の中で，北京語を「官話」と呼び，これは「清国上流人士の用語」ではあるが，「俗話」の範囲内に属すると述べている。また，本書は，純粋な北京語により，その発音も北京語に基づいているが，「支那語」は発音上「微妙の変化多く」，すでに刊行された中国語書籍の中で，発音の最も正しいものはイギリス人トーマス・ウェード（Sir Thomas Francis Wade, 1818-1895）の『語言自邇集』（1867 年刊）であるが，会話には「耳障りとなること」が少なからずあるので，これに盲従せず北京人の慣用するままの発音を示したと述べている。よって『語言自邇集』と

異なる箇所も多いとする。

1. 3 『清国官話韻鏡』と『清国官話韻鏡音字解説書』（以下『韻鏡』及び『解説』と略す）伊沢修二著，明治 37 年 12 月（1904 年），東京帝国印刷株式会社発行。

本書の体裁は，次のようである。『韻鏡』の正式名称は『視話応用清国官話韻鏡』で，これは北京官話の声調配合表である。表 1 と表 2 の二つの部分に分かれる。表の縦列は字母でまとめ，横列は唇音，舌頭音，舌上音，舌本音，喉音，拗音の六種類に分け，その種類ごとに，開，閉，鼻，複合，分割などの項目に分けている。図の最上横列には「韻尾」十種類を配列している。著者は，北京官話には 380 余りの字音があり，それに「単韻」を加えると 400 近くになると述べている。表 1 と表 2 の区別は，表 1 は漢字で，表 2 は表音であり，この二つは対照することができる。『解説』の正式名称は『視話応用清国官話韻鏡音字解説書』である。「自序」「凡例」「首音之部」「音尾及単韻ノ部」に分かれ，すべて『韻鏡』の理論について説明されている。

著者は「自序」の中で，当時の先進の表音方法を比較研究し，世界共通の表音法を考案し，また実際の中国語にも十分注意を払って，「新式記音法」を定めたと述べている。その目的は，より科学的に中国語音韻の基本原理を明確にすることにあった。

1. 4 『清国風俗会話篇』（以下『風俗』と略す）野村幸太郎，馮世傑共著，明治 39 年 8 月（1906 年），東京文求堂書店発行。

本書の体裁は，次のようである。序，凡例，本文，付録の四つに分かれる。本文は，孟春寅月（正月），仲春卯月（二月），季春辰月（三月），孟夏巳月（四月）などの旧暦の十二ヶ月に分け，さらに，それぞれの月の下で会話の分類をしている。例えば「孟春寅月（正月）」の下には，「喜」「楽」「飲」「唱」の四種類があり，「仲春卯月（二月）」には，「酒」「色」

「財」「気」の四種類がある。十二月で合計 48 種類がある。一つの小分類ごとに、甲と乙の二人（劉と李、主と友、主と僕など）、あるいは三～四の人物による対話形式を採っている。対話文の漢字ごとにかたかなで表音し、漢字の四角に声調をつける。また北京官話による対話文ごとに対応する日本語の訳文をつけている。付録は十二章あり、一章ごとに主題を設けている。例えば、第一章では「紹介」、第二章では「決別」など、具体的な対話形式と表音の形式は本文と同じであり、本文の内容を補充したものである。

花岡伊之作がこの本のために「序」を書いている。花岡はこの序の中で、日清戦争（1894–95）と日露戦争（1904–05）を経て、日本各界の中国の政治、経済などの分野に対する熱心さは日に日に高まり、客観的に見れば、中国語教育の現状を変更する必要に差し迫られていた。このような状況の中、著者の野村幸太郎は、東方書院を創立し、「清国のスペシャリスト（対清の人材）」の養成に力を尽くすために、この教科書を編纂したのである、と述べている。『清国風俗会話編』の出版は、当時の時代背景と深い関係があり、これは当時の時代が生んだ産物と見るべきであろう。

2. 清末期における日本人学者の 北京官話声調の研究の理論と方法

上記の四種類のものは、声調研究の理論と方法を説明するにあたり、それぞれ解釈の視点の異なるところがある。しかし、この中から彼らの北京官話の声調理論と方法の基本的な考え方を導き出すことができる。

2.1 北京官話声調への注音符号の採用と作成

『音鑑』の語音の表記方法は、後の伊沢修二編『支那語正音発微』の序文によれば、「明治二十七年著『日清字音鑑』を著したとき、多く威氏と

鄭氏の方法を継承している」とある。「威」とはトーマス・ウェードのことを指す。ウェードの『語言自邇集』で採用したローマ字による語音表記の方法は「ウェード式ローマ字表記法」と名付けられている。「鄭」とは鄭永寧のことを指し、明治初期の日本外務省漢語学所督長で「仮名式表記法」を採用した。この二種類の方法を併用することについて、声調表記符号の使用の中で説明を加えている。例えば、四声について次のように説明する。上平声は中間部がやや太くなっている縦棒で表わし、嘆息するときに出すような音である。下平声は下部がやや太くなっている縦棒で表わし、驚きのときに出すような音である。上声は左に折れた鉤型の線で表わし、苦痛または失望のときに出すような音である。去声は上部のやや太い縦棒で表わし、下平声とは反対の音調である。これらの声調符号はカタカナ音節の右側に表記し、左側に「ローマ字」式で表記する。四声をアラビア数字で表記、つまり上平声、下平声、上声、去声を 1, 2, 3, 4 とし、必ずローマ字の右上に表記する。この二つを併用することで漢字の声調は一目瞭然となると述べている。

『会話』では、「序言」において、ウェードの『語言自邇集』は数多くある中国語発音研究の中で、最も精度の高い著作であると明記している。よって語音表記方法は「ウェード式ローマ字表記法」を採用しているが、同時に日本人の利用をより簡便にするために「カタカナ式表記法」も採用している。ただし、声調表記には「四角圏点法」の表記法を採用している。中抜き圏点を使用し、上平を表わすときは圏点を漢字の左下に、下平のときは左上、上声は右上、去声は右下に表示している。また声調調値については、次のように表現している。上声は平音で、その音は変化せず、抑揚がなく急である。下平は音が高く、語尾は少し軽く、一直線に向上する。上声は音が強く長く濁る。音の勢いは強く、左方を経て右肩に回る。去声は音が重く、語音の語尾は次第に低くそして消える。さらに重要なことは、声調の異読を表記するときには、四角圏点法を併用して表記していることである。

『韻鏡』は『視話応用音韻新論』を補足する内容である。『音鑑』と異なるところは、『韻鏡』は語音表記法を大きく改善したことである。伊沢修二は「威氏と鄭氏の方法」に満足せず、十年間近くの歳月を費やして漢語音表記法の研究に専念し、自己の創り出した道を歩んだ。『韻鏡』はその成果の一つである。その「序言」の中に明確な説明がある。埋橋徳良は『韻鏡』の語音表記法は伊沢修二が考案したものではなく、王照の『官話合声字母』の成果を採用したものである、としている。王照は日本語のカタカナに啓発され、漢字の筆画を省略し「官話和声字母」を創り出した。しかし伊沢修二は王照の弊害を避けることに力を尽くし、表音方法をより科学的にして精度を高めた。「四声符号」の解説で、彼は声調の音の強さの状態の表現に着目したと述べている。明らかに彼は四角圏点法に満足していなかった。彼の考案した「四声符号」は、後の中国語拼音標調法、一、／、∨、＼、すなわち、上平、下平、上声、去声と似たものである。また中国語に重音と普通字音の区別があることを考慮し、四つの符号の一つ一つに大小二種類の符号を制作し、普通字音には小符号を用い、重音には大符号を用いた。ただし、彼の言う「重音」の機能はやや複雑である。あるものは軽音に対するものであり、重音を加えるのは区別のためであるが、理由の不明なものもある。例えば「評論人」の「評」の字は本来、上平であるが、なぜ重音を加えたのかは、現代人にはその理由を明らかにすることは難しい。それにしても、中国語声調の複雑性を考慮したことは極めて重要なことである。

『風俗』の著者は「凡例」の中で、簡単に編集の目的を説明している。それは学習者に当時の中国の風俗やことばの表現を理解させ、対話形式によって慣用語を学習させることを目的としている。語音の表記法は複雑ではなく、主にカタカナで表音している。声調については、ウェード式がより科学的であるとするが、編集の主旨と適応させるために声調表記は努めて融通を利かせて「自然の発声に従った」としている。伝統的四角圏点法は、彼の唯一の選択となった。

2.2 現実を直視する北京官話声調の研究

四種の著者の声調研究は、全体的に見れば、北京官話の使用現実を視野に入れている。ただし、具体的な取り扱い方については、それぞれ異なる。

『音鑑』では伝統的四声に束縛されずに、北京官話の実際の調類に従って表記している。「序言」の中で、「四声の区別はすべて張滋肪先生の校訂による」と強調している。このように中国人の北京官話声調の発音に基づくことは、声調表記の誤りを最小限に抑える効果があった。

『会話』の著者は、かつて北京で長い期間生活をした経験を持つことから、北京人の官話語音にかなり熟達していた。「序言」の中で、『会話』は、「清国」の教師とともに『日本辞書』『和英辞書』『英清辞書』などの各書を参照して、「日用適切なる北京語のみを編集した」と述べている。『会話』の編集に四年という歳月を費やしているところに、彼の慎重さを窺うことができる。著者は、「清国上流士人」の「言文の間」の隔たりは大きく、学者・文人でも平素の「言論談話」には「漢語（文話）」を使用することは極めて稀であること、平素の「言論談話」で用いるのは「俗話」であり、日本人の使用する「漢語（文話）」と全く区別しなければならないことを指摘している。また、声調で注意すべき点は、北京官話の一字両調であり、例えば「那」には上声と去声があると述べている。これは『会話』の中で多少反映されているようである。

『韻鏡』の「清国官話」「視聴法」は、官話語音の原理を解明することに着眼したもので、語音の表記は『音鑑』よりもさらに精緻で科学的である。伊沢修二のことで言えば、十年の月日を経て、繰り返し比較して改良し、ようやく高度な水準にまで達したのである。使用実態を深く調査していなければ、このように前人の研究成果を越えたものにはならないはずである。北京官話声調のために重音と非重音符号を設けたのは、北京官話における実際の声調をより科学的に表現したいがためであった。

『風俗』はいくぶん異なる。コミュニケーションを円滑に行うための

「風俗」に関する語句や表現が集めてある。この場合、声調への精緻な注釈はそれほど重要ではない。それにしても、彼は依然として「自然の発声」を原則としている。馮世傑の役割は、「自然の発声」をチェックし、北京官話の実際の声調の枠を越えないようにすることにあつたが、表面上の簡単な表記は、現実には実際の声調表記の複雑さを覆い隠すことはできなかったのである。

2.3 北京官話声調の描写と北京官話の声母・韻母の描写の有機的な結合

『音鑑』は声調を横糸とし、縦糸として日本語のカタカナを五十音順で配列し、カタカナでの表音、漢字・ローマ字による漢字音表記を字音表としてまとめ、学習者が容易に使えるようにし、漢字の発音の把握を確実なものにした。これは北京官話語音の体系性にまで考慮したものである。また『会話』は辞書の性質を備えている。日本語の語句をローマ字と漢字、それに対応する北京官話の語句を漢字とローマ字で示している。日本語の漢字語句と北京官話の語句にはすべてカタカナで語音表記が付され、北京官話には漢字の四隅に声調符号をつけている。これは語音表記の様々なスタイルを取り入れて構成したものである。『韻鏡』はその名の示すとおり、中国中世期の代表的な等韻図の『韻鏡』の体裁を踏襲したものである。彼は何度も苦心して符号と図表を改良し、作成したが、それは、ある一定の声韻配合表のモデルに従って行つたのである。その中に含まれる体系的な語音の手法は、古代の『韻鏡』と一致している。

『風俗』は、声調の表記を具体的な語句によって考察し、声調と声母・韻母との結合は状態によって様々に変化する様相を明確に表現している。漢字にそれぞれ声調を表示し、漢語の原文にカタカナで表音を加え、また漢語の日本語訳も付している。他の語音の分析図表と異なるのは、実用を視野に入れていることである。

この他に、北京官話声調の理論と方法を研究する上で、当時の東西の進んだ声調理論と方法の受容が明確になったこと、これによって我々は東西

語音声調の学術理論が日本人学者の北京官話の声調研究に与えた影響を把握することができるのである。例えば、ウェードの語音分析の理念、伝統的等韻図『韻鏡』の語音構造への認識などは、これまでの北京官話声調の研究理論や方法と異なっている。

3. 清末期の日本人学者による北京官話声調研究の実績

この四種の本は、北京官話研究の理論と方法に優れた特色を示したほかに、北京官話声調の具体的研究にも相当な進展を見せた。

3.1 北京官話声調調類のシステムの提示

上述の説明から分かるように、研究者によって、それぞれ研究方法の重点の置き方がいくらか異なり、導き出される結論も一様ではない。しかし、彼らの声調システムに対する指摘と結論は、今日の研究の基礎となっている。北京官話の声調システムは、先に挙げた四種類の本は一致して上平、下平、上声、去声の四つとしており、今日では、陰平、陽平、上声、去声と呼んでいる。これは中国語近代音北方官話声調の変遷史の観点からすれば、元代の周德清『中原音韻』で「平分陰陽」「濁上歸去」「入派三声」と明示されているから、それほど注目すべきことではない。しかし「正音」に対する声調の認識の歴史から言えば、かなり面白い。例えば、元代の『中原音韻』は、当時の大都の「正音」であったかどうか、「入派三声」は入声の消失を指すのか、それとも「その押韻を広げる」ことを指すのか、音韻学会で現在に至るまで論争は止まない。これにより学界の多くの学者が『中原音韻』と清末期の北京官話声調、そして今日の普通語声調との相関関係にまで疑問を持つようになった。中国人学者の陸志韋はその中の一人である。四種類の著者が以上のような共通した見方を有するのは、ある意味では、以上に掲げた特徴が北京官話声調における正音調類によるものであることを証明していることになる。これは長期にわたる研究

者たちの弛まぬ努力の結果である。

日本人学者にとっては、さらに別の深い意味がある。つまり日本の中国語声調教育は、広部精編『亜細亜言語集』が刊行（1879年）されてからの二十数年間で、声調の正音を南京官話の声調を基準としたものから、北京官話声調を基準とするものへと、考え方の変革を成し遂げたのである。これにより、日本の明治維新以後の近代中国語北京官話声調教育システムが形成されたのである。

3.2 北京官話声調に対する調値の創案

これまで、四種の著者たちの声調調値の表記を見てきた。例えば『会話』では、上声は平音で、その音は変化せず、抑揚がなく急である。下平は音が高く、語尾は少し軽く、一直線に向上する。上声は音が強く長く濁る。音の勢いは強く、左方を経て右肩に回る。去声は音が重く、語音の語尾は次第に低くそして消える、と述べている。今日の我々の目から見れば、あまりに曖昧で、科学的な分析が十分とは言えないが、ただ普通話声調調値研究の歴史からすれば、これは避けては通れないステップである。北京官話調値の描写に注意を払うことは大いなる進歩である。難題が提起されることは、後の研究者に北京官話調値の研究の参考となる考えを与えることになるであろう。趙元任の1920年代に考案した五度標調法の初期モデルは、北京官話の声調音の高低昇降の描写から始まったものである。のちに改良を加え、声調の高低昇降の分類を1, 2, 3, 4, 5を用いて表示し、最終的には五度標調法を確立した。位置標調法より、五度標調法の方がさらに科学的実用的になった。

日本人学者の北京官話声調調値の創案は、当時の到達可能なレベルを十分に反映したものである。

3.3 北京官話声調の本調と変調の確認

語句に本調をつけ、変調をつけないのは、漢字字音の注釈の一つのスタ

1. 42 頁 僕：大概了罷，便宜坊蘇盤落錢了，六吊四一（下平）個。

主：就手兒燒一（去聲）隻鴨子，……

2. 73 頁 乙：哈他已然有了八個兒子（上平）了。

108 頁 小：念到孟子（上聲）了。

3. 105 頁 乙：那麼我也（上聲）快種罷 趕明兒個也（下平）許有人請我作皇上。

4. 140 頁 旅客：沒有，除（下平，黑點）了行李，就是使喚的傢俱。

稅官吏：我要看（去聲，黑點）々（去聲，黑點）。

旅客：你就看（去聲，黑點）罷。

5. 159 頁 客：是，以後我借一本戴醇士的（去聲）冊頁臨々罷。

161 頁 客：哼，您的（上平）書論比畫論高的（上平）多。

6. 172 頁 客：有（上聲）甚麼車呀

主：有（下平）馬車，驕車和東洋車。

7. 169 頁 主：我早（下平）起起來兩碗桂元湯，一碗人參湯，還喝杏仁茶甚麼的（去聲）。

188 頁 甲：呸，不（下平）是瘋子，若是瘋子，不（去聲）能有麼這麼一句。

乙：您瞧我說他不（下平）是。

甲：真的，心裡不（去聲）明白的人，不（去聲）能站麼個便宜。

8. 208 頁 丁：那許是手底下不方便（去声，星点）。
 9. 附録16頁 尋人：您知（上平）道（去声）不知（上平）道（去声），
 若是知（上平）道（去声），可（下平，黒点）以請
 （上声，黒点）您告訴我説。

声調を表記する部分で黒点（星点）を打っているのは、重音または軽音を表しているのもあって、その変調を見分ける効果は同じである。『会話』は辞書ではあるが、語音表記の場合には、その声調変化に対して非常に注意を払っている。（例文には原書のページ数を示し、説明を簡便にするために、以下の各語句の括弧内に対応する変調と不変調の字音を示す。）

78 今兒（上平）早起（上平）／77 一（上平）点兒（上平）／86 告（上声）訴／呼吸（上平）／88 孔子（上平）／100 迷糊（上平）／102 希罕（上声）／106 蒙古（上平）／109 姑娘（上平）／110 安慰（上声）／120 大（上平）／121 想（下平）起／121 想（上声）／130 老（下平）爺／131 姥（上声）姥（上平）／134 老（上声）先輩／134 老（下平）板／143 收拾（上平）／145 早（下平）起（去声）／146 算盤（上平）／150 洗一（去声）洗／168 我們（上平）／155 扯（下平）手／174 石榴（上平）／162 指（上平）甲（去声）／171 胡同（去声）／170 便宜（上平）

語句によっては、今日の認識からすると軽声にすべきものが四声で表記されているものもある。この部分は、彼らの感覚では四声のように聞こえたもので、語句の変調によって、誤解を招いたものである。当時の変調理論研究は、科学的な体系的把握がまだできなかったと言える。

3.4 清末北京官話声調の規範

『中原音韻』を清代北京官話の直接の源であるとする学者もいる。そう

だとすれば、『中原音韻』の声調体系から清末北京官話声調までにどのような変化が生じたか、清末期の日本人学者は、これらの変化の研究において、いかなる規範を加え、またこれらの規範が後の研究者の普通語声調の規範に与えた影響がいかなるものであったか、確かに一つの課題であろう。

『中原音韻』の声調体系と清末北京官話の声調を比較してみよう。例えば、入声字を例として、日本人学者の研究状況を把握することができる。

『中原音韻』の声調、入声の三声分属の法則には、入声派入陽平、入声派入上声、入声派入去声がある。声母の観点から見ると、法則性も強く、全濁声母は陽平に変化し、次濁声母は去声に変化し、清声母は上声に変化する。

清末期における北京官話の入声字の状況は、『音鑑』から窺うことができる。「入声派入平声」を例にとると、『中原音韻』魚摸韻「入声派入平声」は「陽平」に分類される。清末北京官話声調の入声字「派入平声」には「上平（陰平）」のものがある。例えば、曲（72）、屈（85）、哭（70）、窟（85）、出（84）、督（71）、禿（71）、屋（69）、兀（69）などであり、これらは『中原音韻』魚摸韻「入声派入上声」の字である。『中原音韻』の「入声派入平声（陽平）」は、『音鑑』の中でも「陰平」に分類されるものがある。「魚摸韻」の独（71）、「齊微韻」の「逼」などがその例である。さらに『中原音韻』の「家麻韻」で「入声派入去声」のものが、『音鑑』では「陰平」に分類されるものがある。例えば、壓（81）、拉（83）、刷（81）である。『中原音韻』の「入声派入上声」の変化は比較的大きく、その中で清声母の字はさらに複雑である。『音鑑』の著者の記録では、当時すでに複雑であった入声字音から平声（陽平と陰平）への変遷について比較分析を行っただけでなく、その規範も明確にしたのである。明らかにこれは権威的な性格を帯び、以降の入声字音から平声（陽平と陰平）への変遷の規範の基礎となったのである。

清末期における北京官話声調の入声派入平声の状況は、当時の声調規範

の一項目にしかすぎないが、清末北京官話声調の全体の規範は体系性の非常に強い研究であるから、もし著者が深く精緻な調査をしなければ、生の資料を入手できなかったことになる。もし生の資料がなければ、声調規範の基礎的な研究は、このように進歩するはずがない。『音鑑』のほかの三本も、これと同じであって、声調規範の分野の形成において豊かな実績を残している。変調と本調を例とすれば、本調は語の本来持つべき声調であり、異読の有無に関わらず発音は固定していること。変調についてはやや複雑で、語句読音や語流変調があったりするが、日本人学者はそのすべてに注意していたこと。つまり基本的な規範を突き止め、明確な区分をし、的確に整理し、声調表記の混乱の状態を改変したのである。規範意識を強化したことは、日本人学者の北京官話声調研究の大きな成果である。これは日本人が中国語声調を学習する際に不可欠なものとなったのである。

3.5 北京官話特有の声調区別の強調

北京官話声調符号の作成とその使用目的は、北京官話に特有の声調の区別を強調することにあった。日本人学者が強調する北京官話の声調の区別は、主に次のようなものがある。

1. 北京官話声調の調類は四つあるが、伝統的な四声とも南京官話の声調とも異なる。

2. 北京官話の調値の描写は曖昧であるが、その他の方言の語音声調の調値と異なる特徴が強調されている。

3. 本調と変調の場合は複雑であるが、表記のときには自然の音に従わなければならない。したがって、声調符号の作成と使用は特に重要であり、ほとんどの学者がこの点を重視し強調している。

4. 北京官話声調を習得することが中国語音を学ぶ難点の一つとし認識されている。日本語との対比を行うことも、北京官話の特有の声調の特徴的な区別を強調するためである。例えば『音鑑』の序言「四声」の始めに「支那語ニ於テ、最モ重キヲ置くクハ、四声ノ別ニ在リ」とあり、『会話』

の「四声略説」の始めにも「四声の変化は支那語研究上最も必要なる条項にして」とある。この場合の中国語声調は北京官話の声調であり、これは日本人の中国語学習における本音であることは疑いない。

4. 清末期日本人学者の北京官話声調研究の限界

清末期の日本人学者が模索した北京官話声調のモデルと、今日我々がすでに認識している北京官話声調とは当然ある程度の違いはあるが、結果的には北京官話声調の科学的研究に向けて確実な一歩を踏み出したものである。これは今日の北京官話声調を研究する学者にとって忘れてはならないことである。日中言語文化交流の先駆者たちは、北京官話声調の研究を重視し、北京官話声調の内的メカニズムを認識することにより、彼らのあの時代の負うべき使命を達成したのであろう。

今日、つまり 21 世紀初めの学者の立場から、清末期日本人学者の北京官話声調研究の限界を議論するのは、先人に対して厳しすぎるようではあるが、決してそうではない。我々は清末期日本人学者の北京官話声調研究の実績をよく理解しているし、今日の北京官話声調研究の実態と比較するのは、さらなる北京官話声調研究の進展のためなのである。同時に外国人を対象とする中国語声調教育研究のための検討と総括でもある。

清末期日本人学者の北京官話声調研究の限界は次の通りである。

1. 日本人が中国語音を学習する視点から北京官話の声調を捉えることで、日本人のための中国語教育の実用性を強調しているが、その反面、声調理論の構築を軽視している。この四種の本は、北京官話声調理論に対する検討が十分でなく、これによって北京官話声調の法則の認識を曖昧にする傾向を引き起こす原因となった。例えば、四声の調値については、一般的な説明しかなく、科学的な分析や論理的な説明が欠けている。変調の存在を認めていたが、変調の法則に対して追究を行わず、その原因と結果の解釈についても言及していない。さらに漢字の本調と語句の変調などの内

容を区別していない。

2. 『語言自邇集』のモデルに捕らわれすぎ、その影響を随所に見ることができるものもある。強引な模倣は、それ自身の創造力のさらなる発揮を阻害し、その矛盾も非常に大きくなる。例えば、『会話』において、北京官話語音について、ローマ字で表記しながら、日本人の北京官話を学習するニーズを考慮して、カタカナ表記も用いている。ローマ字で北京官話語言を表記することには、語音表記の精度が低いという欠点があるが、カタカナで表記すれば、さらに北京官話語音の実際の音価とかけ離れてしまう。しかも、両者の語音表記は必ずしも一致せず、学習者にとってはどれを標準音にすればよいのか、混乱を招く。『会話』の声調表記は『語言自邇集』のみに依拠するため、必然的に積極性に欠けている。『音鑑』は割合良く、声調調類の表記はできるだけ統一するように努めているが、それがかえって機械的な語音表記のスタイルに陥ってしまっている。生の声調実態が往々にして軽視され、その科学的な研究価値が損なわれてしまっているのである。

3. 標音方法の立ち後れとともに、声調の表記法がまだ伝統的なスタイルから脱し切れていない。中国語の歴史音韻学の研究で最も遺憾なのは、我々が中国語の歴史的な音韻の体系を構築するには、資料となる実際の音価の材料が欠乏しており、その中で調値の材料はさらに見つけにくいことである。それは、中国語の歴史音韻学の研究をなす当初は、まだ有効な音標モデルがなかったからである。それゆえ中国語の歴史的な音韻の体系構築には、実際の資料からの推理の代わりに、仮説を用いて構築して行くしかないであろう。声調の研究も同様である。中古の四声で言えば、平声、上声、去声、入声の四つの調類のあることは確認できるが、この実際の高低昇降は分からない。これは調値の資料的な限界があるので、避けがたい必然的な結果である。一方、清末期にヨーロッパの比較言語学の理論が日本に伝わった。北京官話調値に対して、より現代的な語音表記方法を用いたはずがあるが、なぜ伝統的語音表記方法を用いたのか、不思議なことであ

る。その後遺症として、我々は依然として当時の北京官話声調の調値を明確に捉えることができず、北京官話の四声調値の研究において、清末から今に至るまでの声調の変遷過程を把握し難くしてしまったのである。その他に、当時の日本人の北京官話声調の学習について言えば、四声調値の正確な表記がなかったので、北京官話の調値を習得することが非常に困難であり、標準的な北京官話声調を学習する可能性は低かった。辞書や教科書の内容と理論の限界によって、学習者は相当な不便を被り、実際に中国語語音を聴くというスタイルで学習を行うしかなかったのである。

清末期日本人学者の北京官話声調研究の限界は当然これだけにとどまらない。そうは言っても、我々は清末期日本人学者の北京官話声調研究の実績を過小評価してはいけない。結果的に見れば、この研究は当時の到達可能な域にまで至ったのであり、これはしっかりと評価しなければならないのである。我々今日の学者は、十分に清末期日本人学者の北京官話声調研究の成果を細かに検討し、これに含まれる学術的価値を掘り起こし、そして正確な評価を加えねばならない。当面の間は、まだ研究の余地のある重視すべき研究テーマであるが、漢語音韻史と対外漢語教育の研究については、ともにこの方面に対する注意が十分とは言えないのである。この研究を深めることによって、清末期日本人学者の北京官話声調研究に潜んでいるさらに大きな学術的価値がきっと次第に明らかになっていくであろう。

主要参考文献

- (1) 波多野太郎『中国語文資料匯刊』第三編（1993年）、第四編（1994年）、第五編（1995年）、不二出版株式会社
- (2) 六角恒広『中国語教育史研究』、東方書店、1988年
- (3) 安藤彦太郎『中国語と近代日本』岩波書店、1988年
- (4) 埋橋徳良『日中言語文化交流の先駆者』白帝社、1999年
- (5) 唐作藩『音韻学教程』、北京大学出版社、2001年
- (6) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院、1999年
- (7) 李无未「南宋孫奕俗説「清入作去」考」、『中国語文』1998年第4期、1998年

- (8) 李无未「南宋孫奕俗説「平分陰陽」存在的基礎」、『声韻学論叢』第10集，2001年
- (9) 李无未「対外漢語教学課本中「変調」的標記符号問題」『漢語学習』2003年第6期，2003年

[付記] 日本語への翻訳は、関西学院大学文学研究科桐藤薫氏の訳文をもとに、関西学院大学経済学部于康教授にお願いしました。また、関西学院大学文学部小倉肇教授に補訂をしていただきました。ここに記して御礼申し上げます。

(リ ムミ・中国・吉林大学古籍研究所教授、副所長)
2003年度関西学院大学文学部客員研究員)